瀋陽における歴史街区とは

昨年はじめて訪れた瀋陽の街は、想像していた以上に近代化の進んだ都市であった。

満州族の住居建築の保存と、これを再活用するための計画の依頼を受け、これまでの調査資料の写真に幾度となく目を通していたのだったが、その朽敗した黒灰色のレンガの伝統家屋の姿が脳裏に焼き付いていたせいで、あたかもこうした建物の連続が街の光景であるかのように、錯覚していたのかもしれない。

現実の街は、朽敗とも伝統とも無関係な現代建築によって形づくられ、これらはわずかに都市の中心部に残る満州族の住居群を飲み込まんとする勢いで拡大していた。その様相は、多分に古い建築の解体とともに発展する、他の多くの都市の光景と類似しているようにも思えた。

しかし一方で、ここが中国の都市であることを強く印象づける独特のモチーフや色彩も随所に溢れている。故宮の極彩色の彫刻をプリントした壁面や、赤に金の縁どりの看板、伝統建築風の瓦屋根のエントランスなど、あたりまえの四角い建物にもどこかしらにこうした中国的なものがデザインされているので、訪れる外国人にも、ここが中国の都市であることを実感できるのであろう。トータルに伝統建築を模しているものもあれば、ガラスカーテンウォールのファサードの一部に伝統的モチーフを添付しているものなど、その度合はさまざまだが、これがまさに中国都市建築のアイデンティティの表現方法なのだと感じさせられた。

そして瀋陽市当局はまさに現在、清朝期の歴史遺産をもつ歴史都市として、この独自のアイデンティティの発揮に力を注いでいる。歴史的遺構の発掘と活用、古典建築の様式を模したファサードによる街並みの整備などが、近年急速に進められている。都市化の波に飲み込まれる寸前の運命であった「満族民居」も、こうした市の方針によって、遺構のひとつとして保存されることになり、新しい活路を見い出すこととなったわけである。

瀋陽市規劃設計研究院では、旧城郭内に約3ヘクタールの「満族民居」による歴史街区を計画することによって、瀋陽故宮を中心とする地区を、歴史・文化的エリアとして整備する方針をたてている。

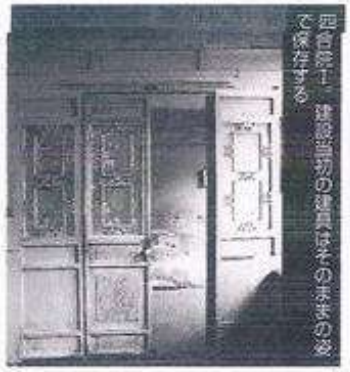
今回はその第一段階として、この歴史街区の一部に当たる約7500㎡の敷地の街区計画および住居の保存設計を行うことになった。この敷地は1997年に実測調査が行われた住居区でもある。計画は、この敷地に残る比較的保存状態のよい住居をベースに、同様に市の中心地区に残存しながらも、将来的に取り壊される可能性の高い、保存価値のある住居を移築するという形で行われる。市内に残るわずかの住居も、その大方が朽廃や増改築などにより清朝期当時の元の姿を大きく失っているため、保存状況のよいものは残して他を解体し、復元や新築の建築物により地区を再構成しなおすこととなる。

この新しい歴史街区を形成するにあたって、その計画には大きく二つの目的がある。ひとつは歴史的な遺構で文化的マーケットを生み出し、その文化的マーケットによって文化財を支える仕組みを築き、これによる観光業の発達によって、経済の発展を押し進めていくこと。

そして二つ目は、国内はもとより国際的な注目を集めることができるインターナショナルなメトロポリタンにふさわしい街区の整備。これらはいづれも瀋陽市の意向である。後者においては、東アジアの歴史的・文化的財産の研究や国際会議のための施設として整備したい、日本側の要求とも重なる。

すなわち、国際的に開かれた文化的な施設とする一方で、観光地として集客できる要素も不可欠となってくるわけである。

「満族民居」は、厳密な保存と修復が要求される「故宮」のような第一級の歴史建造物に比べれば、その再活用のあり方は比較的自由である。そこで用途的には、個人住宅から公共性の高い施設機能への変換を図り、研究所や会議所、博物館などの文化・研究施設と、ホテルやレストラン、土産品店などの観光施設を複合した計画とすることで、公共的な建築・街区として都市の中で生かされ、なおかつ、観光資源として以上の意味をもつ、国際的にも開かれた歴史街区になることを目的としている。



四合院Ⅰ：建設当初の建具はそのままの姿で保存する

四合院型住宅による街区計画

瀋陽の中心地区に残る満州族の住居は、対称型の平面と閉鎖型の外観とをもつ、いわゆる四合院型住宅である。平屋家屋が左右均等かつ対照的に中庭を取り囲むことで、基本ユニットの住宅が構成される。外周をレンガ（磚）の塀で囲み、その南北方向の中軸線上の南側に、南入りの入口「大門」をもつ。この最小単位の住宅が、道路に連続的に平行配置される形で街区が形成されている。

現在歴史街区として計画しているこの住居街は、街区を取り囲む大通りと、街区の中央を東西に走る専用道路とに平行する形で、住宅が連続している。新しい街区も、この既存の原形にほぼ従った上で、保存状況のいい建物を残し、その他の建物を再構成し直すという形で計画を進めている。

風化したレンガ（磚）や瓦は、オリジナルの装飾と同様のものを焼き直す

街区計画の中でその中心となるのは、すでに実測調査が終了している2棟の四合院住宅である。

そのひとつは、もともとこの住居区に清朝末期に建設された建物（四合院Ⅱ）で、街区中央を走る専用道路の通りに面して、その通りの北側に位置する。

もうひとつは、ちょうどこのひとつ目の住宅の南北方向の中軸線上の、街区中央を走る専用道路を介した南側に、別敷地から移築する「張学良夫人の兄の邸宅」（四合院Ⅰ）である。

この2棟の四合院住宅のうち、街区中央の通りの北側に位置する保存住宅（四合院Ⅱ）の方は、街区を囲む大通りに面した、街区外から直接の北入りの入口を欠いているので、一般市民や観光客にとってはアクセスしにくいため、満族の文化継承と研究のための、専門的機能をもつ諸施設の中心的な建物として利用する。

またもうひとつの、中央の通りの南側に移築される建物（四合院